論考

保育者の誕生

―東京女子師範学校初代主任保姆 松野クララ来日の経緯について―

立浪澄子

二〇一一年十一月三日、東京青山霊園で松野クララ顕彰碑の除幕式が行われました。この碑には、すでに本誌春号で紹介されたように、洋装金髪の女性を中心にして洋装や和装の幼児（その中には、当時としては大変少なかった外国人幼児も何人か交じっています）、そして和装結髪の日本女性も二人加わって遊戯をしている陶版画が碑文と共にはめ込まれています。碑文には

「松野磵の妻クララ（一八五三～一九三一）
ドイツ、ベルリンに生まれる。
日本人男性とドイツ人女性の正式な国際結婚第一号。
明治九年、日本で最初の官立幼稚園（東京女子師範学校附属幼稚園）の主任保母としてフレーベルの幼児教育法を導入し、指導にあたる。
また、ピアノ奏法の指導に先駆的役割を果たした。
日本の近代化に尽くした功績を讃え、顕彰碑を建立し、次代に伝える。
平成二十三年十一月」

▲松野クララ顕彰碑

と刻まれています。ここに記されているように、絵の中の洋装金髪の女性、松野クララは旧姓をクララ・ルイーズ・ツィーテルマン（Clara Louise Zitelmann）といい、碑文にあるとおり、日本にフレーベル主義保育法の実際を紹介した最初の人です。倉橋惣三はその著書の中で、松野クララは「わが國幼稚園の恩人ともいふべき人」[注1]であると述べています。

しかし、筆者がいつも不思議に思ってきたのは、日本に初めて幼稚園が設立された時、結婚のために来日したばかりのクララが幸いにも保育者の資格をもっていたので保姆となったという説明です。例えば、『日本幼稚園史』では、クララは「獨逸人で、その頃農商務省の役人であった松野磵（はざま）氏の夫人であった。幼稚園のことについて詳しく、殊にその保育法の理論及実際は、フレーベルからの直傳であるといふので、女子師範學校が幼稚園を創めるに當つて、請うて主任保姆に迎えたのである」[注2]と紹介しています。『日本の幼稚園』でも、「偶然にも、こういう人が近くにいたということは、お茶の水幼稚園にとってだけでなく、幼稚園創生期の日本にとって、どれほどしあわせなことであったかわかりません」[注3]と述べています。

クララの保育法が「フレーベル直伝」であり、保姆就任前にすでに磵と結婚していたかのような記述は倉橋の誤解ですが、クララの就任が「偶然」であるということには、これまでもあまり疑問をもたれていないようです。

しかし、クララが来日したのは一八七六（明治九）年八月十四日、田中不二麿が幼稚園開設の伺いを出したのは前年一八七五（明治八）年七月七日、クララ来日の一年以上も前でした。しかも、その設立伺いは、一度目は却下されたので、八月二十五日に二度目の伺いが出されました。その中で、田中は「幼稚園ノ儀ハ児輩ノ為メ良教師ヲシテ専ラ扶育誘導セシメ遊戯中不

知々々就学ノ楷梯ニ就カシムルモノニシテ」[注4]と述べています。彼はすでにこの時、教師こそ教育の要であるという認識をもっていたのです。幼稚園の「良教師」として田中はいったいどんな人物を頭に描いていたのでしょうか。

明治八年当時、日本に幼稚園保育法の実際を知る人がいたとは考えられません。クララはまだドイツを出国すらしていませんでした。しかし、全くの新規事業であった幼稚園の直接の担い手について田中が何の目途もなく伺いを出すとも考えられません。当時、田中には幼稚園指導者としてすでに十分意中の人物がいたと考えるのが自然ではないでしょうか。

ここで思い当たるのが、岩倉使節団がベルリン滞在中（一八七三（明治六）年三月九日～三月二十八日）に、磯がベルリンで木戸孝允や大久保利通と出会っていることです。[注5]

田中はこの岩倉使節団に随行していたのですが、このころは別行動を取っており、一八七二（明治五）年八月五日（新暦）、使節団より先にベルリンに到着、ヨーロッパ各地を見聞し、一八七三（明治六）年一月三日ベルリンを出発、三月二十四日帰国しています。彼はこの間何度もベルリンと各地を往復し、幼稚園を見学したり、幼稚園に関する文献の翻訳を当時田中の通訳兼秘書として同行していた新島襄に命じたりしています。[注6]また、その間にロンドンにいた木戸を訪ねたりもしています。この時期、田中がベルリンで磯と出会い、外遊中芽生えた彼の幼稚園開設のプランを磯や木戸に語っていたとしたら？

小林富士雄氏の調査によれば、磯は一八七四（明治七）年二月二日、クララと姉マリーの立ち会いのもとセント・ヤコブ教会（St.Jacobi.C）で洗礼を受けたということですから、[注7]もし二人

がすでに一八七二（明治五）年ごろから知り合っていたとしたら、もしかしたら、クララも磯のそばにいて田中と出会っているかもしれません。

なぜなら、田中は幼稚園開設が認められた後、翌一八七六（明治九）年四月から一八七七（明治十）年一月までフィラデルフィア万国博覧会に出席するため渡米、幼稚園開業時にも不在だったのです。にもかかわらず、彼は後年、「予は積極論者として（中略）遂に其開設を断行し、而して彼の幼稚園の誕生国たる独逸人にして、当時既に松野磯氏夫人となりしクララ子を主任教師に任ぜり」[注8]（傍点筆者）と述べています。ここで田中が「既に」と述べているところからも、彼は磯とクララの婚約を早くから知っていて、当初からクララが来日した暁には指導者として迎える手はずを整えた上で幼稚園開設の伺いを出したと考えることはできないでしょうか。

クララもまたすでに来日後は幼稚園教育を伝授する役割を自覚していた節があります。

カテリーナ・ツィーテルマン（Katharina Zitelmann 一八四四～一九二六）は世界中を旅したドイツの女流作家ですが、その著『Als die Welt noch offen war』に、彼女が一九〇四（明治三七）年から一九〇五（明治三八）年ごろ東京のクララの家にほぼ六週間滞在したという記録があります。その中で彼女は、クララは磯と婚約した後、磯の希望どおりに幼稚園教師としての卒業試験を受けた、と述べています。[注9]

カテリーナ・ツィーテルマンが述べていることが事実だとしたら、磯は田中（または木戸）から日本における幼稚園開設の計画を聞き、それでクララに幼稚園教師の資格を取るよう勧めたのではないでしょうか。そして、木戸もまたそのことをよく承知していて、それがクララを

わざわざ横浜まで出迎えに出たり、宿所の便宜を図ったり、英語教師として招くなど、クララに対する並々ならぬ計らいにつながっていったとは考えられないでしょうか。そうでなければ、一八七五（明治八）年八月二日に帰朝した磯はどのようにして日本に幼稚園開設の機運があることを知ったのか、甚だ疑問が残ります。

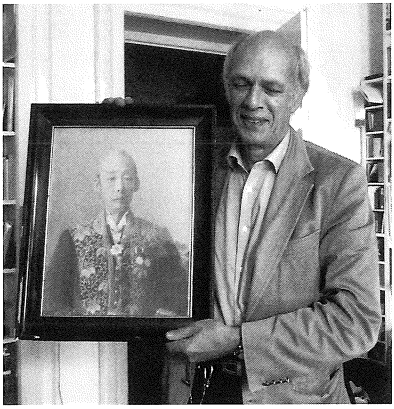
しかし、磯が在独時からすでにその情報を得ていたと考えれば、クララが、磯帰国後一年近くたってからようやく、ドイツを出国している事実にもうなずけるものがあります。さらに、八月来日後、磯の病気や結婚の延期などトラブル続きの中にあって、クララは早くも十一月には豊田芙雄らに恩物の作成方法やフレーベル保育法の講義を開始し、幼稚園をスタートさせていますが、結婚のため来日したクララにとって主任保姆就任がまったく予期せぬ事態だったとすれば、これはかなり不自然ではないでしょうか。しかし、出国時クララにはすでにその用意があったと考えれば、このような事態も彼女はそれなりに冷静に受け止めたとも考えられます。またその後、磯がクララの講義の通訳を買って出たり、豊田芙雄への手紙を翻訳したり、クララが妊娠中でありながら群馬まで講演旅行に出ることもいとわないなど、クララの仕事に極めて協力的だった事実も理解しやすくなります。

筆者は二〇一〇年八月、ミュンヘンを訪れ、クララと磯のひ孫ニコラウス・フォン・ハインツさんにお会いしましたが、その時ハインツさんは長松幹（一八三四～一九〇三）の肖像写真を見せてくださいました。おそらく、クララがドイツ帰国の際、大切に持ち帰った遺品の一つに違いありません。磯の姉、長松夫人は長い間クララとは近所に住み、夫の死後はクララと同

居していたということですから、長松一家はクララにとっても特別の存在だったのでしょう。

二度の大戦を経て、今なおドイツで子孫の手にあるその写真は、百余年の時を越えて、まるでクララがそこにいるかのような感慨を筆者に与えてくれました。

（長野県短期大学）



▲長松幹の写真を手にする
Nikolaus von Heinz氏
（2010年8月15日筆者撮影）

参考文献

1 倉橋惣三・新庄よしこ『日本幼稚園史』フレーベル館 一九五六年 p.345

2 1に同じ。p.344

3 上笙一郎・山崎朋子『日本の幼稚園』理論社 一九六五年 p.16

4 『太政類典第二編明治四年～明治十年 第二四五巻 第四類 学制三 学校 七五』国立公文書館

5 成川房幸「故松野磵先生の譚」『明治林業逸史』大日本山林会編 続 一九三一年 p.438 他

6 小林哲也「『理事功程』研究ノート」京都大学教育学部紀要（二十）一九七四年 pp.89-90 出典 新島襄全集八 年譜編（京都同朋舎出版 一九九二年 p.109）

7 小林富士雄『明治のロマン 松野磵と松野クララ』大空社 二〇一〇年 p.108

8 田中不二麿「教育瑣談」大隈重信撰副島八十六編輯兼発行『開国五十年史』上巻 p.734

9 Katharina Zitelmann『Als die Welt noch offen war』一九一六年 pp.156-157

訳については、坂牧悦子氏の助力を得た。